

ART KISS

Contemporary Art Museum, Kumamoto

LETTER

FOR KUMAMOTO

ART PEOPLE

vol.

11

2002.5.15 熊本市現代美術館発行



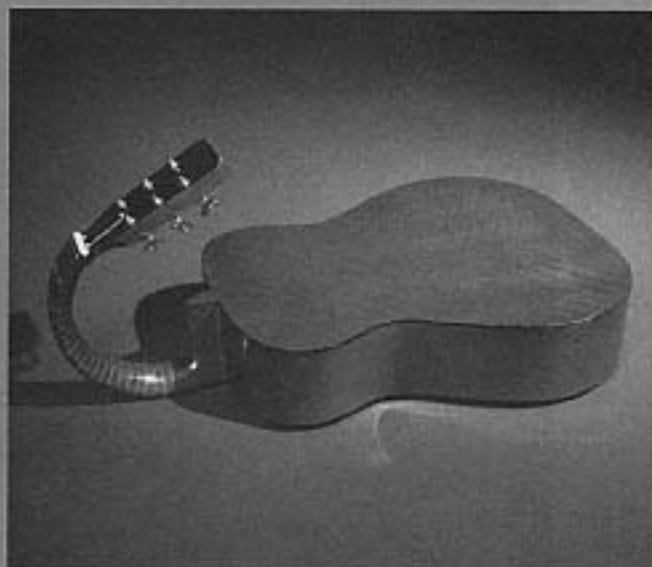
TABACCO

WORLD NEWS

ホイットニー・バイアニュアル Whitney Biennial 2002



Karin Campbell <When I Close My Eyes> 2001



Christian Marclay <Vertebrale> 2000

2年に1度、アメリカ美術の最先端を紹介するホイットニー・バイアニュアル(3.7~5.26)が開催されました。今回の特徴は映像作品が影をひそめ、オブジェ指向の作品が復活してきたというもので、会場はお祭りのような賑わいを見せていました。しかし、その明るさは、昨年9月11日の同時多発テロ事件の傷の、まだ癒えていないアメリカの心理の裏返しといえるかもしれません。

[アート・ド・キャン]

ART DE GYAN

ジェイ

熊本市大江本町6-9(味噌天神電停前) ☎372-8732

- 「水と油と 父、安川英三 娘、安川美歩展」(3.1~3.9)父はダイナミックなタッチの油彩、娘は幻想的な水彩とそれぞれの表現。
- 「静物とミニアチュールを中心に鎌田徹油絵展」(3.11~3.20)花や器物などの小品を鎌田さんの繊細でリアルな技法で表現。
- 「ひがし野女性絵画グループ展」(3.2~3.30)一村先生指導のグループ展。(K・T)

カド

熊本市新市街13-11サンケイビル2F ☎355-4080

- 「SANBA LIFE展」(3.7~3.11)は、にんぎょう作家・ワタナベユリコさんの初の写真絵本である「SANBA LIFE」のキャラクターたちの展示会。カラフルなハギレにクラクラ魅せられてしまったのがにんぎょう作りのきっかけという言葉通り、そのクラクラ感が伝わってくるような色使いとデザインで、見るものを引きつける力を感じた。(E・Z)

画廊喫茶南風堂

熊本市北千反畑町5-13宅建ビル1F ☎343-9664

- 「第4回女性絵画展」(3.1~3.9)は12名の作品展。
- 「ぐるうぶPALETTE展」(3.11~3.20)は城武信さんに学ぶ方々の作品展。
- 「第18回アート・リッチ展」(3.21~3.31)は、洗われるような筆遣いの作品が並んだ。(Y・H)

熊本伝統工芸館

熊本市千歳城町3-35 ☎324-4930

- 「かずらのオブジェ 植川久美子展」(3.12~3.17)美しく生まれたかずらのオブジェ。優雅さの裏に、素材に言うことを聞かせる力業を感じさせた。

●「元田黒 元田島大作陶展」(3.12~3.17)湧ききや水玉模様の平皿に惹かれた。

●「坂本三置一蘭一香を築しむ展」(3.12~3.17)タビストリー、カーペット、服など、全体に大きな植物の形が入ったタビストリー「DANCE with PLANT」は、終りなく繰り返される大地の営みを思わせる傑作。

●「木工藝展」(3.13~3.17)手仕事工房の皆さんによる木工芸の作品展。木目の美しさを最大限引き出して制作された作品が並ぶ。講師松本清二さんの「偽造飾盤」はさすが完成度が高く、足の文様などに研ぎ込まれた感性が光る。

●「之・椅子設計所モダン家具展II」(3.19~3.24)無垢の木を素材にした家具の展示。今回は椅子が中心。洗練された造形感覚で、見るだけでも心地よい。

●「藍と草木染展」(3.19~3.24)肥後藍染船工房の展覧会。服・ストール・バッグ・帽子など、自然の色で染め上げたやさしい風合いの作品。

●「金彩赤絵の器展」(3.19~3.24)宇坂恒治さんの陶芸展。土の色の地と赤い波模様が折り重なり、ダイナミックだ。緑、赤、金と銀一色彩が美しく響き合っ、月夜の海に漂い出した舟、そんな風景が浮かんでくる。

●「佛像彫刻展」(3.25~3.31)山高龍雲さんと大塚行雲さんの仏像彫刻の展覧会。

●「松本隆代 春のひょうたんランプ展」(3.26~3.31)ひょうたんに開けられた直径5ミリから1センチほどの多数の丸い穴から、柔らかな光が漏れるランプ。異文明の巨大な建造物のように、あやしい魅力に心を奪われた。

●「友禅にて描く」(3.27~3.31)顔料友禅にて布、紙、ポリエステルなど多様な素材に描画する。講師の後藤綾さんのもと、50人の方が友禅を楽しんでいる。

●「21世紀を創る若者たちの作品展2002」(3.26~3.31)伝統工芸館の伝統工芸技術養成講座(肥後象眼、木工芸、竹工芸)合同展。30名127点という規模で開催された。それぞれの丁寧な仕事ぶりに感服。(K・K)

熊本岩田屋六階美術画廊

熊本市板町3-22 ☎322-1111

- 「作陶五〇周年人間国宝 徳田八十吉耀彩展」(3.12~3.18)九谷焼の伝統の上に独自の「彩釉磁器」「耀彩」を生み出した人間国宝、三代徳田八十吉の作品展。明るい黄色から深い青までの華麗な色彩が印象的。(K・T)

島田美術館ギャラリー&島田美術館蔵寸龍窟

熊本市島崎4-5-28 ☎352-4597

●「島田満子陶展ーシワの美学ー」(3.7~3.12)「鯨」の持つ美しさに魅せられた島田満子さんの陶芸展。

●「永武絵画展」(3.19~3.31)永さんの絵画に描かれる人物は、何かを諦めつつ、心の傷を抱えたまま生きていく決意を見せる。腫れ、血が滲んだような絵肌に引き込まれた。(K・K)



「かずらのオブジェ 植川久美子展」植川久美子さんの作品

鶴屋百貨店

熊本市千駄本町6-1 ☎356-2111

●「市松人形展」(3.6~3.12)まずその衣裳の美しさに息をのむ。工房による市松人形は、古製を人形用に仕立て直し、着せる。思い出の着物を人形に、と依頼する方が少なくないとのこと。人間に近い、あたたかさを感じる作品だった。

●「アール・ヌーヴォー・ガラス工芸展」(3.13~3.21)ガレ・ドーム兄弟・ミューラーらのガラス工芸展。

●「染色創作 ソフィアフローラ作品展」(3.23~3.28)新しくオープンしたテトリアの「鶴屋ふれあいギャラリー」最初の展覧会は、染色した布を使って作る花の作品展。色とりどりの花たちに、会場の雰囲気も一気に華やいた。(K・K)

ギャラリー萌

熊本市水前寺6-27-20 ☎383-7001

●「押し花展」(3.1~3.31)石原京子さんの《冬の詩》など、大画面に構成されたドラマティックな押し花が並んだ。(H・T)

画廊喫茶三点鐘

熊本市千駄本町3-8有明ビル ☎326-3040

●「木戸征郎個展」(3.1~3.10)パリ・スペインなどの風景を描いた15点。鮮やかな色彩を用いた画面は、ひとつの調和を見せている。「光の印象を捉えて表現している」と木戸さんは話してくれた。



「木戸征郎個展」木戸征郎さんの作品

●「宇治寿康先生おめでとう展」(3.11~3.20)三点会会長宇治寿康さんが叙勲を受賞したのを祝って開催された展覧会。三点会は毎月3日にジャンルを越えた方々の親睦会として三点鐘で開かれる。37人のメンバーがそれぞれの作品を展示。

●「第2回写真会」(3.21~3.31)13人のメンバーによる写真展。風景など。(K・K)

ギャラリーキムラ

熊本市水前寺3-5(上通ビル9F) ☎327-0166

●「第2回銀座ギャラリー画友展」(3.4~3.10)11人による人物・風景など21点の展示。

●「アートとクラフト5人展」(3.11~3.17)松永忠勝さん(写真)、かがやき劫さん(油彩)、高田一進さん(陶芸)、福永幸夫さん(染色)、渡辺ヒデカズさん(陶芸)による作品展。渡辺さんの「シリーズ 宇宙」はSFに出てくるコロニーのような造形で面白かった。



アートクラフト5人展渡辺ヒデカズさんの作品

●「岸田淳平展」(3.18~3.31)主に顔を描く画家。輪郭には無頓着で、目・鼻・口に執着する。ものを見、おいを嗅ぎ、ものをしゃべる、そうやって生きる人間とい

うものに興味があるのだろう。紙に描きつけた絵の存在に圧倒される。(K・K)

アートのスペース大宝堂

熊本市上通5-6 ☎354-2156

●「第29回アニマル絵画教室展」(3.6~3.11)は山崎才哉さんのもとで学ぶ5才から高校生、そしてその後も続けている方の展覧会。想気よく描いた油絵作品が数多くみられた。

●「第4回パッチワークキルト展」(3.13~3.18)は島田清美さんのキルトサークル一会の28名が作品を発表した。自分のためにつくる楽しさが感じられ、明るい会場となった。平崎藤子さんの「残照」は、光沢のある生地を用い、光が次第に柔らかく溶けていく様子を巧みに表現していた。

●「矢野田哲郎個展」(3.20~3.25)は風景画と肖像画から成り、いずれも静謐な作品。(Y・H)

●「第4回賛筆吉書展」(3.27~4.1)九州賛筆吉書会(島岡孝一主宰)主催のチャリティ知名士展である。政界、財界、文化界のトップクラスの先生方にいただいた。座右の銘を販売し、福祉機関に寄付をするのだという。各界で一家を成した人の独自の風格が話題を呼んでいる。(T・M)

ギャラリー・ひまわりハウス

熊本市植町3-22 ☎322-1111

●「願ありの思いあなたへ原画展」(3.5~3.17)は、生まれたときから脳性マヒの障害を持ち、20年間誰ともコミュニケーションを取れずにいた彼女が、「抱っこ法」という心理療法によって次第に回復。自らの思いを絵と詩の創作を通し、表現を始めたのだという。笑顔の多いその作品からは、見る人の心を和ませ、他者とコミュニケーションでできる喜びが伝わってきた。(E・Z)

四季の彩

熊本市上通4-10トラヤビル ☎351-8332

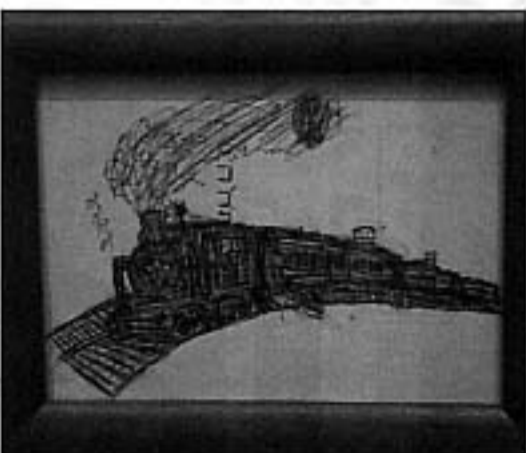
●「有働孝昭・一心行の大桜スケッチ展」(3.1~3.31)は、1999年以来、毎春、現場で描き続けているという桜の作品を数日にあわせて展示。(Y・H)

上通郵便局プラザU

熊本市水前寺3-37-1F ☎326-4123

●「土あそび展」(3.13~3.19)陶芸広場赤びーまんの作品展。各キャプションに陶芸歴〇年という記入があり、始めたばかりの人、ベテランの人各々技を競って楽しく制作している様子がうかがえた。

●「個性キラキラ三人展」(3.2~3.25)熊本県立熊本養護学校小学部の作品展。伊藤隆哉くんのペン画は画力も集中力もすさまじくクオリティの高い作品を生み出していた。深瀬義徳くんの粘土作品は、かたちを瞬時に捉えるある種の天才性を示し、また藤岡ゆうきくんの切り絵もひとつひとつの切り取られた形へのこだわりがおもしろい。



「個性キラキラ三人展」伊藤隆哉くんの作品

●「卒業作品展」(3.6~3.12)熊本大学書道部硬友会の作品展。

●「2002原色押花アート展」(3.20~3.26)掛軸に仕上げた神山明子さんの《宵桜》や、「それぞれの高さに満る花菖蒲」という自作の俳句を添えた篠川トシ子さんの《風と水を友に》は、瑞々しい四季の草花とそのまわりの雰囲気まで、押花として画面に優しく閉じこめ、絵巻物を見ているような楽しさがあった。

●「熊本厚生年金会館写真教室二期会」(3.27~4.2)被写体をクローズアップで撮影する作品が多かった。(H・T)

喫茶りんどう

熊本市水前寺6-18-1 熊本県庁本館下 電話383-1111(内線5856)

●「野々島学画展」(3.1~3.31) ステンドグラスやミュージングのアクセサリ、手芸の人形やポーチなどが展示された。(A・S)

熊本県立美術館本館・分館

熊本市千早城町2-18 電話351-8411

- 「朱土会日本画展」(3.5~3.10) 日本画独特の色使いに苦心している様子が見られる。
- 「尚美会」(3.5~3.10) 尚絅大学、尚絅短期大学美術部の作品展。在学生だけでなく、OGなどの作品も展示。
- 「卒業・修了制作展」(3.5~3.10) 熊本大学教育学部美術科の卒業展。在校生の作品もあわせて展示。山本清さんの《玄》シリーズは、墨と鳥の子紙を使い若々しく独自の静謐な雰囲気を出していた。
- 「PHOTO SHOW」(3.12~3.17) 崇城大学写真部の作品展。野尾真樹子さんの作品《19歳》(what?)は、ハイティーン特有の不敵な勢いと素直さを捉えていて好ましかった。
- 「NHK 熊本文化センター受講者共同作品展」(3.12~3.17) テコバージュから俳句まで55教室にわたる様々な文化活動に積極的に参加する300名以上の方々の作品展。それぞれ力作が並ぶ。(H・T)
- 「第28回城心会書展」(3.19~3.24) 書道研究城心会(江口幹城会長)の会員65名が「春の花ごよみ」と題して春を謳歌する内容の漢詩、短歌、俳句等を表現した書道展である。全体的に濃厚な様式が多い。一部に斬新な試みが加われば観る側は楽しい。(T・M)
- 「燧々会写真展」(3.19~3.24) 写真と自然の好きな5人組、西利子さん、入江若江さん、米村九州勇さん、原田純昭さん、中山朝晴さんの展覧会。原田純昭さんの《園夫》の叙情的な情景は構図の均整も色彩的なバランスも美しい。
- 「象象塾〜陶芸展〜」(3.19~3.24) 陶芸教室象象塾の作品展。各々制作者の好みに応じた使いやすそうな器が並んでいたが、ひときわ眼を引いたのが、江口陽子さんの白いブードルの形をした花器だった。造形の無駄のない美しさ、形態の柔らかさともに、実物大に近いサイズが、所収をくすぐる。



「象象塾〜陶芸展〜」江口陽子さんの作品

●「中島七光モノクロ写真回顧展」(3.26~3.31) 1950年代の熊本の情景を映し出した写真展。美しい人、年老いた人、明るく輝く少年を温かい眼差しで記録した中島さんの優しさは、観客へのプレゼントとして配られた、美しい花ばなのハガキからも感じられた。



「中島七光モノクロ写真回顧展」中島七光さんの作品

●「第22回熊本美術科同窓会展」(3.26~3.31) 岩木芳子さんの《ふるさと・松合朝市》は、黒白の大画面をバランス良く構成した佳作。(H・T)

●「熊日書道・篆刻教室合同作品展」(3.26~3.31) 平方研水さんの指導するグループは篆刻と筆書の組み合わせた作品や、隷書、刻字作品等で16人が49点を展示。松本達印さんが指導する書道グループは、9人が行草書や「かな」等20点を展示している。いずれも素直な作品で好感がもてた。平方さんは甲骨文字で屏風を、松本さんは行書で《南無阿弥陀仏》の軸等を賛助出品していた。(S・K)



平方研水さんの作品《善徳先師人楽具事利風甘雨天降之祥》

ギャラリーレストラン芳文

熊本市南高江5-7-76 電話311-3344

- 「狩野英彰 第2回水彩画展」(3.12~3.18) 山並みや季節の草花・果物が丁寧に描かれていた。
- 「花に誘われて ゆとりへのいざない展」(3.22~3.31) クレイアートいしずみの作品発表展示。(H・T)

スペースレインボー

熊本市新市街10-7(シャワー通り) 電話324-0387

- 「書 22展」(3.16~3.21) 尚絅大学書道コース卒業の22期生10名が書作22点を額や軸、パネル等で展示。22期卒業なので「書22」として、はじめてのグループ発表。山下綾さんの《不戦》や、油彩で甲骨文字をかいた下野明子さんなど、それぞれに工夫や創意もあり、楽しい会場となっていた。(S・K)
- 「WORDS WORLD - 想いのことば展 -」(3.16~3.21) 市内在住の岡真理子さんが、10年以上、折に触れ書きとめてきた「ことば」の展覧会。その一節より「とても風が気持ちのいい日 私は原子にもどりたくなる」(194.5.7)。(A・S)

アートルーム イケオ

熊本市新市街6-6 電話324-1414

●「第2回伊津野篤志展」(3.13~3.17) ikura-chan「Sazae-san」など遊び心あふれるタイトルがつけられた伊津野さんのヤードランタン。昨年度のテーマのワインクーラーに続いて、ひらめいたものをどどん形にされているそう。胸のもたらす柔らかな光が、伊津野さんのお宅に招かれたかのような雰囲気をつくり出していた。



「第2回伊津野篤志展」伊津野篤志さんの作品

●「桜華展」(3.20~3.25) 熊本の4大学の漫画・イラスト系サークル(熊本学園大学ヴィジュアルアート研究会、熊本大学こんべいとう、崇城大学漫画研究会、九州東海大学CVA)による合同展。イラストパネル、原画の他、ジオラマやガンダムの模型まで幅広く楽しめた。(A・S)

「上通清掃整理促進運動、実行！」



ハイレッド・センターにやって、白衣、マスク、サングラス、腕章で清掃スタート！

さる5月16日、熊本市立城東小学校のお友だちと、上通アーケードを大清掃！60年代初頭に一世を風靡した現代美術のアーティストグループ、「ハイレッド・センター」のパフォーマンスを再現しました。くわしくは、肥後っ子美術新聞「びいなす」第3号での緊急レポートをお楽しみに。



道路におちたガムをきれいにはがします。

この連載では、熊本にお住まいで、様々なジャンルで活躍されている方々に、活動によせる熱い思いを語っていただきます。第10回目は喜多流能楽師の狩野瑠璃さんに楽しいお話を聞きました。

— まず、喜多流についてお話を聞えますか。

狩野: 能楽には、観世、宝生、金春、金剛、喜多の五流派があります。さきの四派は、室町時代に興ったのですが、喜多流は江戸時代、第2代将軍徳川秀忠の頃に興りました。他の流派と違うところは、前持者が武家方だったため、武道的なものを主張しています。他の流派が「優美」にたとえられるなら、「質実剛健」というか、がっちりしている感じなんです。私の一徹も代々細川家のお抱え給師だったのですが、大祖父の話で喜多流の能楽師友枝家に父が入門したのがはじまりです。

— 人の心は常ならずと言いますように、時代によって能楽が大流行したり、また一方で顧みられない時代がありますね。今は不安が蔓延した時代。状況的に能の精神が求められている気がするのですが。

狩野: 今、能に興味を持たれる方は、稽古事を通してストレスを解消しつつ、肉体的にも健康になるようです。「人生が変わった」とおっしゃる方もいるようです。私は、能の中にある、「起こりうることは全て良しとする」という精神を大切にしたいと思っています。すべてを受けとめるという考え。これが今という時代に能が人々を引きつける理由の一つになっているのかもしれない。それに、伝統芸能という古いものと捉えがちですが、その精神のなかにある普遍的なものを突き詰めて考えると、むしろ、時代の先をいっているような気もするんですよ。

— 熊本と能との結びつきには、なにか特別な印象を感じますが。

狩野: 伝統芸能が顧みられなかった近代黎明期を乗り越えるとき、熊本の能楽のその芸質の高さは重要な役割を果たしました。というのも、西欧文化を急激に吸収した地域では、能は完全に廃弊しきっていたのです。そういう意味では、今ある日本の能楽は、熊本が支えてきたと言っても言い過ぎではないんです。熊本は土地と人との結びつきが強いでしょ。能楽も神に奉納するものとして存在してきましたし、熊本のこころも奉仕の精神が強い。能というものを受け入れる精神性が、土壌にも、歴史にも、深く根ざしているんですよ。私も熊本という土地に強い愛着心を持っていて、特に海外に出かけたときなどは、離れがたいものを感じます。



喜多流能楽師
狩野瑠璃
さん
Shuho Kano

— エクス・アン・プロヴァンスの能楽堂も見せていただきましたが、すばらしいですね。

狩野: 外国で公演するとき、受け入れやすい迎合のスタイルを考へるか、はじめは少し悩んでおりました。というのも、海外の方とお話しているときに、能にある曖昧模糊とした感覚、これがどうにも口で語れるものではない。私は日本の心とはこの感覚かもしれないと感じました。結局、きっちり型の出来たものをお見せしたのですが、観客の方々の割れんばかりの拍手をいただいたときには、フランスの文化に対する情の深さを感じましたね。

— 舞台の上での舞い手をみると、ある境地に達しているかのような「醒めた」静けさを感じます。

狩野: 舞っているときに、肉体から離れて、自分を客観視出来るのが私にとって良い状態ですね。ちょっと神がかりっぽい(笑)。作品は当然そこにあり演じているわけですが、肉体という素材を通して魂が動いている感覚なんです。息の詰り、開きのリズムに体を任せているだけなんです。そういう状態で舞台の上に立つとき、自分の魂の場を得る至福の瞬間を体験しますね。そこに至る過程としては、修業時代に何にでも挑戦できる体作りを欠かしてませんでした。もちろん肉体は枯れていきます。しかし大切なのは、三位一体(心、技、体)のバランスなんです。能の世界は60代になってようやくものを言える世界なので、いよいよこれからが本番ということですよ(笑)。

— 能というものを別の言葉に言い換えてみるならば…

狩野: 難しい質問ですね(笑)。舞い手は、常に、能の完璧な様式美の水面下で、新しいものを生み出すための創造と破壊の精神闘争を行っています。そういう闘争を経て、舞台のうえで「あそび」。能とは、「あそび」ですね。魂の「あそび」とでもいいたいでしょうか。見る人を引きつけ、その場に集った全員でひとつの世界を構築することを、いつも心に置いてます。

— 最後に、読者の皆さんへメッセージをお願いします。

狩野: 今、ようやく時代は、物質的なものより心的なもの重要視するようになってきました。能のなかにはそういう精神が強く磨かれています。人間というのは持っている時間に限りがあるもので、しかも能というのは行き着く先のないものですから、能と出会ったその縁を大事にしていきたいなと思います。能を含め、文化財というのは、とかく保存保護が声高に叫ばれますが、今を生きる人と共存できるようにしていきたいと強く願っています。能の舞台を通して、人と人と、国と国との交流を深め、人の生命の躍動感を共有できる文化というものをあらゆる人と楽しみたいと思っております。

— ありがとうございます。

(4月19日、於: 狩野瑠璃さんご自宅、聞き手 南島 宏)

今月の展覧会

- パリ パレ・ド・トーキョー 「フランク・ダヴィッド:セルロイド」展(4.28~5.30)
- ロサンゼルス ロサンゼルス現代美術館 「Zero to Infinity:アルテ・ボーヴェラ1962-1972」展(4.28~9.22)
- シドニー シドニー現代美術館 「第13回シドニー・ビエンナーレ:The World May Be (Fantastic)」(5.15~6.28)
- ロンドン テート・ブリテン 「Hamish Fulton」展(~6.2)
- 韓国 国立現代美術館 「A Second Talk」展(5.24~6.14)
- 福岡アジア美術館 (093-263-1100) 「第2回福岡アジア美術トリエンナーレ2002」(~6.23)
- 北九州市立美術館 (093-892-7777) 「シニャック展」(5.11~6.9)
- 坂本善三美術館 (0967-46-5732) 「坂本善三と阿蘇」(4.24~6.16)
- 鹿児島市立美術館 (099-224-3400) 「世界遺産 ポンペイ展」(~5.29)
- 大分市美術館 (097-554-5800) 「2002FIFAワールドカップ記念文化催事 大分現代美術展2002 アート循環系サイト」(5.25~7.14)
- 熊本県立美術館 (096-352-2111) 「西洋絵画の400年 東京富士美術館珠玉のコレクション展」(5.16~6.23)

今月の4コママンガ

誤算



イラストレーション:佐藤 文香

編集後記

駆け足でニューヨークに行ってきました。あの世界貿易センター(WTC)では、いまだ発見されない数十名の人々を探し続けるブルドーザーが動き続けています。しかし、驚かされたのは、そこから数ブロック離れたさびれた商店街で、それが無ければWTCの跡地を見ることができないというチケットを配り、普段はあまり人通りの多くない、その道筋の商店街の町並しに、悲惨な同時多発テロを利用してという笑えない現実でした。私たちが見落としていることは、残念ながら無数にあるということなのです。心したいと思います。

(学芸課長 南島 宏)

寄稿者紹介

兼城 昌山 (S.K)

Shozan Kaneshiro

約40年前、商業喫茶セルバンに通っていた頃、作家集団VIFが発見した。詩人、画家、写真家、書家等である。「生きる」との意で、若い意欲作家の仲間であった。なつかしいが今も新鮮でいい話でもある。

森山 淡草 (T.M)

Tanso Moriyama

簡分前に、一冊に「美術界の三筆」と評価する人もある画家の故・中川一政画伯が「上手は下手の手本、下手は上手の手本」と揮毫しているのを見て大いに共鳴したのを、何故か今頃思い出して、また共鳴している。

田代 晃三 (K.T)

Kazo Tashiro

先人の遺した高みの橋頭、刺がなせいらのかを学びたい。彼の方法をまねても仕方ない。

学芸員紹介

本田 代志子 (Y.H)

ペランダのハーブが勢いよく育っています。緑はやはり緑れた目を休ませてくれます。

蔵座 江美 (E.Z)

幼い頃、母の目のカーネーションの代わりにでしてあげた記憶があります。なんとなく戻ってませんか?

金澤 韻 (K.K)

九州ビエンナーレを見て、生まれて初めて韓国へ、日本と回っていたり戻ってなかったり、朝晩深かったです。

坂本 顕子 (K.S)

陣中、コンテンポラリーダンサーの動きを真直で見て、体を動かさねば、と真剣に思いました。

富澤 治子 (T.T)

最近、空気に漂う静電の匂い、おひいふん濃くなってきた。若い日々をけなげに耐えた植物の生命そのものを感じる。

発行元/ART KISS LETTER アートキッス・レター Vol.11 2002年5月15日発行 〇無料〇

編集人/田中 幸人

編集長/南島 宏 担当/富澤 治子

印刷/熊本県印刷センター協業組合 デザイン/松永 社デザイン事務所

発行/熊本県現代美術館 〒860-0845 熊本市上通2-3

TEL.096-278-7503 FAX.096-359-7894